

Title	境界線上のアメリカ : ワシントン・アーヴィングの「インディアン論」
Author(s)	飯田, 未希
Citation	Osaka Literary Review. 35 P.80-P.92
Issue Date	1997-02-10
Text Version	publisher
URL	https://doi.org/10.18910/25379
DOI	10.18910/25379
rights	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/repo/ouka/all/>

境界線上のアメリカ — ワシントン・アーヴィングの 「インディアン論」 —

飯田 未希

I

ワシントン・アーヴィング (Washington Irving) の1819年に出版された『スケッチブック』(*The Sketch Book*) は、アメリカ人作家としては初めて、商業的にも批評の上でも大西洋の両岸で成功した作品として知られている。この作品はまずアメリカで出版され、その後イギリスで出版されたが、その際に二篇のインディアンに関するエッセイ¹が追加された。この二篇のエッセイ、「インディアンの性格の特徴」(“Traits of Indian Character”)、
「ポカノケットのフィリップ王」(“Philip of Pokanoket”) は、従来は単なる“filler”として見なされ、それ自体として注目されることはほとんど無かった。『スケッチブック』は、ジェフリー・クレイヨン (Geoffrey Crayon) というアーヴィングの作ったペルソナがイギリスでの見聞を報告するという体裁をとっている。インディアンに関するこの二篇のエッセイは、このような虚構の語り手が設定されておらず、また内容的にもインディアン擁護論が真摯な論調で語られるというように、イギリスの旅行案内的な他のエッセイとは、かなり異なった印象を与える。このため、アーヴィングがこれらのエッセイをイギリス版において追加したのは、単にアメリカ的な味付けをし、商業的な成功を見込んでのことだったと解釈されてきた。²

この小論は、私がアーヴィングを論じる上で重要と考える、あるコンテクストを提示するための覚書としての性格を持っている。そして、そのために、ここでは彼の「インディアン論」に焦点を絞って論じたいと思っている。結

論を先取りして言うならば、そのコンテキストとは、インディアンという表象を媒介としたアメリカとヨーロッパの関係の歴史であり、ここで特に問題となるのは18世紀のスコットランド啓蒙学派のアメリカ観である。アーヴィングは、この『スケッチブック』において、そのような表象の歴史とかわりながら、アメリカ人としての自らの位置を探っていたのではないかということ、以下の試論において考察したい。

II

「インディアンの性格の特徴」では、語り手／アーヴィングは、共時的な視点から、インディアンに関する記述の中の偏見を訂正していく。時代や登場人物の明確でないエピソードを引用しながら、インディアンの戦闘行為の特徴と考えられている「残酷さ」、「戦略を用いる臆病さ」などを偏見に満ちた書き手（“bigoted writers”）によって作られた歪められたイメージであるとし、反駁していく。次の、「ポカノケットのフィリップ王」では、1世紀半前のインディアンと白人との戦争（フィリップ王戦争）を語りなおすことによって、戦争でのインディアンの「高貴さ」を主張し、先のエッセイと同様にピューリタンの歴史記述における歪みを強調する。このようなインディアン論は、非常にありふれたものであり、特に取り上げて分析するほどのものではないと、アーヴィングの研究ではみなされてきた。

しかしながら、ヨーロッパ系アメリカ人がインディアンを語るという行為は、複雑な問題を孕んでいる。ヨーロッパによるアメリカの「発見」以降、従来の世界観の中にアメリカとその住民をどのように位置づけるかということが常に論争されてきた。³ それは、「アメリカ」という表象と現実の支配とをめぐる問題である。第一に、長い間ヨーロッパの視線の中で、「アメリカ」はインディアンの地として表象され、「アメリカ人」とはインディアンを意味していた。そして、ヨーロッパ系の入植者自身もその言葉（「アメリカ人」）に自分を同一化する必要を感じていなかったという点である。⁴ し

かし、第二に、ヨーロッパの視線の中では白人の入植者がインディアンと混同され、「未開の地」では人間は「退化」と考えられていたため、両者がともにヨーロッパの人間よりも劣った存在だと考えられていた事である。これは、18世紀の、環境の人間に対する影響を重視したロバートソンなどの環境理論によって「科学的に立証」され、またゴールドスミスの詩によって通俗化され、アーヴィングの時代には非常に影響力を持っていた。⁵そして、第三に、アメリカが国家として独立する際、インディアンを自らの社会から除外したという問題がある。アメリカの独立以降、「アメリカ」という言葉と領土の両方から、同時にインディアンは追放されはじめ、「アメリカ」は新しい「アメリカ人」によって占有されることになる。⁶このような、「アメリカ」に関するヨーロッパと「アメリカ人」の間での意味のずれが、アーヴィングがイギリスで『スケッチブック』を出版する際にもまだ存在していたのではないかと思われる。そして、アメリカ人であるアーヴィングがインディアンについてヨーロッパの読者に語るという行為は、彼（アメリカ人）がインディアンとは異なったものであることを示すための、彼の自己提示の戦略であったのではないかと、私は考えている。

『スケッチブック』のイギリス版において追加されたこの二篇のエッセイのうち、先に置かれた「インディアンの性格」の冒頭で、語り手／アーヴィングは、その「ずれ」に対する彼のスタンスを提示している。

There is something in the character and habits of the North American savage, taken in connection with the scenery over which he is accustomed to range, its vast lakes, boundless forests, majestic rivers, and trackless plains, that is to my mind wonderfully striking and sublime. He is formed for the wilderness, as the Arab is for the desert. His nature is stern, simple, and enduring; fitted to grapple with difficulties, and to support privations.⁷

ここで、語り手は、非常に微妙な形でインディアンの特徴とアメリカの景観とのつながりを示唆する。インディアンの性格や習慣は「崇高」(“striking

and sublime”）であると彼は感じるが、それは彼の心のなかで「彼 [インディアン] のいる風景」と結び付けられた時である。このように、出だしの文章では、語り手の心のなかで、しかも「崇高」という言葉を通じて曖昧にしか結びついていないインディアンと彼の住む環境との関係は、次の文章では逆に自然とのつながりが強調される。すなわち、インディアンの特徴は「未開地」（“wilderness”）にふさわしく形成されたものであることが言明され、そのような環境に相応しい彼の性格が述べられる。しかしながら、彼らの性格がどのようにして、また何によって、自然に相応しいものとして形成されるかは、この受動態の表現（“is formed”）からは窺い知ることができない。

この、書き出しの一節において、アーヴィングは環境論が前提としていた「アメリカの自然環境の劣悪さ」と「退化したアメリカの住民」というイメージをまず逆転させる。そして、環境を視覚的な「風景」のみに限定し、インディアンをその「風景」の付属物とすることによって、観察者としての自分（アメリカ人）とインディアンの間の距離を作りだす。そして、アメリカという「環境」のなかで自分とインディアンを同化させるヨーロッパの視線の内部で、彼らとの差異を示そうとする。そして、環境理論においては原因・結果の関係にあった、アメリカの「環境」と「人間の状態」を、この冒頭の一節でも何らかの影響関係はあるように仄めかすが、それが実際何であるのかは、彼は明確にしない。そして、これから見ていくように、アーヴィングは、この環境理論の原因・結果（環境・人間）の関係を、「植物」の隠喩の連鎖に置き換えることによって、インディアンと自分を含めたヨーロッパ系アメリカ人を差異化していくのである。

III

「インディアンの性格」出発点では、先にも述べたように、アーヴィングは、当時の環境理論が北アメリカの自然の過酷さとその人間への悪影響を主

張したのに対し、彼は逆にアメリカの自然の崇高さとインディアンの崇高さの共通性を指摘する。アメリカおよびインディアンのイメージそのものは逆転されているが、環境論的な思考法そのものは否定されておらず、曖昧な形でむしろ肯定されている。そして、ここでは現在形で語られることによって、現在のインディアンについて語っているような印象を与えられる。

しかし、2段落目で、すぐにその印象は否定される。現在のインディアンは不幸であり、彼はその不幸の原因として、白人との戦争、白人の著述家によって歪んだイメージが与えられたことをあげる。これらは遙か昔（“early periods of colonization”）に起こったということが言明されている。そして、これ以降、語り手はインディアンに対する偏見の訂正という作業を開始するのだが、その出発点において、重要な区別を行っている。すなわち、「現在のインディアン」と「過去のインディアン」という区別である。現在のインディアンは、「社会」（“society”）の害悪によって「退化」した存在（“degenerate beings”）であり、インディアンに対する間違っただ意見を生み出した原因でさえある。彼が闇から救い出す必要があるのは、「正しいインディアンのイメージ」であり、それはすなわち「過去のインディアン」である。

しかし、現在のインディアンが退化している原因である、白人の文明に対する「受動性」、「影響の受けやすさ」は、奇妙なことに、比喩がずらされることによって、過去、現在を通じてのインディアンの本性となる。最初、インディアンは、アメリカの崇高な景観（“vast lakes,” “boundless forests,” “majestic rivers”）の比喩的な同格であるかのように述べられるが、文明のインディアンへの影響に言及されるとき、景観の表面上の「植生」が、彼らの比喩的な同格となる。（“Society has advanced upon them like one of those withering airs, that will sometimes breed desolation over a whole region of fertility.” [272] [my emphasis]）そして、インディアンが他の支配者（“the undisputed lords of the soil”）であった頃の、幸福な世界が描写されるが、その世界の終わりは、

次のように結論付けられる。

Such were the Indians whilst in the pride and energy of their primitive nature: they resembled *those wild plants* which thrive best *in the shade of the forest*, but shrink from *the hand of cultivation*, and perish *beneath the influence of the sun*. [273-4]
[my emphasis]

「果てしない森林」(“boundless forests”) にたとえられたインディアンは、文明と比較されるとき、森のなかの「下生え」(“wild plants”) にまで縮小してしまう。そして、それは森を切り開く「手」であると同時に、どういうわけかこのアレゴリー的な表現のなかで、その上に輝く「太陽」にも置き換えられた「文明」によって、滅びることが運命付けられているのである。ここで植物のアナロジーによってインディアンを語ることで、「野性の植物」が白人の「耕作」(“cultivation”) によって滅びるのと同様の構造が、インディアンと白人の「教化=文明化」(“cultivation”) にもあることが示唆される。そして、「教化=文明化」は、「太陽」と曖昧な形で同格とされていることから分かる通り、否定的なものとしては捉えられていない。ヨーロッパの「高貴なる野蛮人」が、文明を批判するための文明の対立物であるのに対し、アーヴィングのインディアンは、文明と対立するが、文明を批判はしない。むしろ、「文明の手によるアメリカの環境の変化=太陽の影響=野性植物の死」という隠喩の連鎖によって語られることによって、インディアンはその不在=絶滅によって、文明のアメリカでの広がり暗示することになる。

IV

語り手/アーヴィングは、インディアン戦争における「残酷さ」、「戦略を用いる臆病さ」、「死を前にした時の無感動」という「誤った」イメージを、

それぞれ相対化して説明していく。ここで肝心なのは、それらのイメージが、実際には環境理論によってインディアンとアメリカの植民者に共通する特徴だと当時考えられていた点である。⁸したがって、それらの「偏見」を、イギリスの読者の前で訂正するというアメリカ人アーヴィングのポーズには、当然戦略的な含意がある。ここで、彼は差異化と同一化という二重の戦略を用いる。一方で、彼は自分を科学的に対象と距離をおいた「探検家」として提示し、探検の対象であるインディアンと自分の差異を強調している。（“He, however, who would study nature in its wildness and variety, must plunge into the forest, must explore the glen, must stem the torrent” [284]）

たとえば、「戦略」（“stratagem”）を論じた箇所では、まず自分がインディアンに対して偏見を持つ側であるということを述べ、彼らとの差異を示す。（“We stigmatise[sic.] the Indians, also, as cowardly and treacherous, because they use stratagem in warfare, in preference to open force.” [277] [my emphasis]）実際には植民地時代からアメリカの民兵は「戦略」を用いてきたのだが、そうすることによって、同時に、そのような行為はインディアンにのみ特徴的なものとして提示されることになる。その後、語り手は「戦略」は、インディアンが生存競争において、「動物」と戦う必要から用いられるようになったもので、それは彼らの基準（“rude code of honour”）においては完全に正当化されるものであると説明する。このように、アメリカの劣悪な風土環境によって、人間が退化し、動物的な行動をとるようになるという環境理論は、相対的な価値判断を提示することで否定される。しかしながら、「戦略」をもちいるという「未開」の属性そのものは、アメリカに住む「文明人」であるアーヴィング達と、インディアンを区別する特徴として新たに、そして再び彼らを象徴することになる。

このように、科学者＝探検家としてインディアンとの差異を強調する一方で、彼は同時に情熱的にインディアンの立場を弁護し、彼らに共感する。彼は「観察者」としての距離を捨て、時折インディアンの高潔さ、「私たち」

の偏見を、感嘆文を通して強調する。(“How different was their state while yet the undisputed lords of the soil!” [273]) 彼は、また、しばしばインディアンの内面に入り込み、かれの心理を「直接」読者に語りかける。(“They cannot but be sensible that the white men are the usurpers of their ancient dominion” [277]) このように、彼はすすんでインディアンの立場に自分を同一化しようとする。しかしながら、このことは観察者としての彼の距離化とは必ずしも矛盾しない。彼は、この二篇のエッセイでインディアンの歴史的事実と心理面の関係の考察からインディアンの行動を説明しようとする。これは、スコットランド学派の環境論の二重の推論 (conjecture)⁹、すなわちインディアンの行動の特徴(「残酷さ」)の原因を、アメリカという劣悪な「環境」にあると見なし、またその同じ原因から彼らが「文明」へと進歩することもできなかったとする方法とは著しい対照をなしており、その批判となっている。「共感」(“sympathy”)はむしろ外面に対するのと同様の「観察」(“observation”)を、「内面に対しても行うことによって得られるものである。(“If we would but take the trouble to penetrate that proud stoicism ... which lock up his character from casual observation, we should find him linked to his fellow-man of civilised [sic.] life by more of those sympathies and affections than are usually ascribed to him.” [271])

このように、彼は「観察者」として、インディアンの外面的な行動も、内面の心理も理解できるという立場を強調する。そして、このような内面に対する理解から、ビュフォンに見られるような「自然誌」的な記述や、ロバートソンのような普遍的な人間の進歩の「一段階」としてのインディアン像を乗り越え、インディアンの「歴史」を「再現」することが可能になることを示そうとする。このように、インディアンを他者として対象化しつつ、共感によって内面を知ることが出来ることを示すことによって、語り手/アーヴィングは、インディアンを表象する力を占有し、イギリスに対して「文明人」としての身振りを行うことになる。しかし、それは同時にインディアンから

再び表象の能力を剥奪するということをも意味するのである。

V

「ボカノケットのフィリップ王」は、フィリップ王戦争という、17世紀半ばに起きた実際の戦争に言及されていること、エッセイ全体が歴史的なナラティヴとしてひとつのまとまりをもっていること、現在のインディアンや白人の状況に関してはほとんど言及されないことなど、前のエッセイ「インディアンの性格」とは対照的な特徴をもっている。しかしながら、このエッセイは、非常に重要な点で、前のエッセイと共通している。つまり、植民地時代のフィリップ王というワンパノアグ族の王がイギリス人入植者に敗北し、部族全体が絶滅した戦争が語られているにもかかわらず、なぜ彼らが滅びることになったのか、その原因については明確に述べられていないのである。「インディアンの性格」では、彼らが滅びる原因は「植物」の隠喩の連鎖に置き換えられ、それ自体が明確にされることはなかった。両者に共通する肝心な点は、語り手の「探険」の対象が、インディアンの「特徴」(“traits”)に限定されているということ、すなわち文明による変化を受けていない、進歩の「初期段階」にあるインディアンに示される「人間の本性」(“human nature”)に対象が限定されているということである。(“They [Indians] ... show what man is in a comparatively primitive state, and what he owes to civilisation[sic.]” [283]) 語り手自身が、インディアンの不幸な現在の状況は、白人による収奪にあったと述べているにもかかわらず (“They [Indians] have been dispossessed of their hereditary possessions by mercenary and frequently wanton warfare.” [271])、彼自身の興味を「インディアンの特徴」に限定することによって、白人とインディアンの戦争のエピソードはインディアンの「高貴さ」という「特徴」を証明するものとなり、現在の「退化」した状態という「結果」との関係は曖昧になる。先のエッセイでは、インディアンと白人の関係という「全体」から、興味を

インディアンの性格という「部分」に限定することによって、奇妙なことにインディアンの「植物的受動性」という「特徴」が、インディアンと白人の関係全体を「説明」する換喩的なアレゴリーとなった。この「インディアンの性格」において示された、因果関係を「植物」という隠喩に置き換えるという戦略は、同時に次の具体的なエピソードを読むための枠組みを読者に提供するものとなっている。

VI

「フィリップ王」のエッセイにおいて、フィリップ王が敗北する原因が不明確であるのには、二つの理由が考えられる。第一には、フィリップ王や彼の友人など、インディアンの個々の敗北において、白人を動かした「裏切り者のインディアン」(“renegado Indians”)の存在が強調されていることである。第二には、インディアンの「進歩のなさ=停滞=野蛮」がいくつかの方法でしめされ、それが白人の「進歩=文明」と比較され、両者の差異が示されることである。

ここでは、問題の二点目、インディアンの「停滞=進歩のなさ」ということについてだけ言及しておきたい。語り手はインディアンに関する清教徒の記述の歪みを強調し、彼らが「妄想」の虜になっていたことを繰り返す。そして、清教徒の迷妄は、彼らの居住する環境が「未開」であることに起因するとされる。(“... the wildness of their situation, among trackless forests and savage tribes, had disposed the colonists to superstitious fancies ...” [289]) しかし、ここでは、まず第一に歴史的な視点が強調されること、すなわち清教徒の迷妄が過去の「歴史的」な出来事であることが強調されることによって、そして第二に先のエッセイでアメリカの環境(植生)が「文明」によって変わったことが強調されたことによって、迷信深い「過去」の清教徒と「現在」の清教徒及びアメリカ人との繋がりは切断され、現在のアメリカの白人との差異が強調される。つまり、清教徒の迷信

は「歴史化」されている。

これに対し、インディアンの迷信は「歴史化」されない。植民者のあいだでフィリップ王の脅威に関する様々な「俗信」(“superstitious notions”)が囁かれたことを説明しながら、突然語り手はその「俗信」の内容を、すなわちフィリップ王が「魔術」(“necromancy”)を行うということを一般的な現象として肯定し、しかも、それが現在まで続いていることを、この論全体の歴史的な論述形式にも係わらず強調する。(“This indeed was frequently the case with Indian chiefs ... and the influence of the prophet and the dreamer over Indian superstition *has been fully evidenced in recent cases of savage warfare.*” [292] [my emphasis]) 先の「インディアンの性格」では現在のインディアンの「植物的受動性」が過去に投影されたが、ここでは逆に過去から現在(未来)に向けて、彼らの「野蛮さ＝理性の欠如」が投影され、彼らの普遍的な本性として強調される。そして、先のエッセイで「アメリカの植生の変化＝文明の広がり」が強調されていたために、ここでインディアンは文明による変化を受ける見込みのない、進歩から見はなされた存在となり、現在のアメリカの白人とは対照的な存在であることが暗に示されることになる。そして、インディアンの敗北の原因、そして現在の「退化」した状態の原因が、暗にインディアン自身の本質のなかに求められることになる。

VII

このように、アーヴィングがヨーロッパに示したテキストは、一方では「文字を持たなかったもの」の歴史を語りなおすことを強調し、ヨーロッパからの意味付けに逆らおうとするが、その一方、インディアンの性質を説明するというポーズによって、自らとインディアンとの差異化を行った。そして、インディアンを環境の変化になぞらえること、またインディアンを歴史的な存在として語ることによって、現在の(当時の)アメリカ人像(つまり、

地理的・環境的な自己像) からインディアンのシンボリックな意味合いをめぐり去ろうとするものでもあった。

「新世界の論争」、つまりヨーロッパによるアメリカの表象の問題は、アメリカの独立とともに終わったとされることがおおい。すなわち、西部の測量・調査が開始されることによる「データ」の集積、またインディアンの強制移住など「実体的」な関係のなかでは、これまでのインディアンの表象は意味を持たなくなるとされるのである。(もしくは、単に考慮されない。)そして、これ以降のヨーロッパ系アメリカ人によるインディアン像が問題にされる際、その「歪み」は白人側がインディアンを白人のネガティブとして捉えていたためとして、いわば「同時代的」な問題とされる。¹⁰ 私が、ここで、アーヴィングの二つのエッセイを提示したのは、そのような「表象」は、すぐに「データ」や「実体的関係」にとって代られうるものではないということを示したいがためであった。むしろ、アーヴィングの「客観的」な対象にたいする態度が示していたように、「データ」も、歴史的な表象との関係から自己と対象(インディアン)を分節することによってしか生まれないものである。そして、ピアスのいうように、そのような思考の枠組みそのものも、「実体的な関係」によって変化を被るが、¹¹ しかし、それは「歴史的出来事」に即応したかたちで変化するものではないのである。

注

- 1 この二篇のエッセイは最初アーヴィングの編集した雑誌 *Analectic Magazine* に1814年に掲載された。それについては筆者は未見である。
- 2 Jeffrey Rubin-Dorsky, *Adrift in the Old World* (The University of Chicago Press, 1988), p. 95.
- 3 Karen Ordahl Kupperman, ed., *America in European Consciousness, 1493-1750* (The University of North Carolina Press, 1995). 特に introduction 参照。
- 4 Joshua C. Taylor, *America as Art* (Washington: Smithsonian Institution Press, 1976), pp. 5-7.

- 5 Robert Lawson-Peebles, *Landscape and written expression in revolutionary America* (Cambridge University Press, 1988), pp. 40-43.
- 6 Roy Harvey Pearce, *Savagism and Civilization* (University of California Press, 1988. Rev. ed. of: *The savages of America*. 1953), Chap. 2.
- 7 Washington Irving, *The Sketch Book of Geoffrey Crayon, Gent.* (London: Everyman's Library, 1968), p. 271. 以下この作品からの引用はこの版によりページ数のみを記す。
- 8 Lawson-Peebles, Chap. 1.
- 9 H. M. Höpfl, "From Savage to Scotsman: Conjectural History in the Scottish Enlightenment," *Journal of British Studies* 17 (1978): 19-40.
- 10 たとえば Sacvan Bercovitch, ed., *Cambridge History of American Literature*, vol. I, II (Cambridge University Press, 1994) の "New World Disputes" と "The Frontier and American Indians" という章立てに典型的に示されている。
- 11 Pearce, pp. 76-77.